

パキスタンフンザ ミルシカル (5486m) 03. 6-7 海老原 道夫

6月27日4年前と同様に、1人で成田を発ち、21日間をかけてパキスタン・フンザ近くのミルシカル (5486m) に登った。

前回は事前に登る山を決めずに現地 (ヒンズーラジ) に入ってから目標を選んだりしたので時間と体力を無駄に費やしてしまい心得の悪さも手伝い高度障害がきつく、ついに高さ 200m を残しギブアップしてしまった反省から比較的情報をとりやすいフンザ付近の山地図から、自分で登れそうな 5500m 前後の山に○印をつけ、それをパキスタンのナジール事務所に FAX を送ったところ、この山を選んで薦めて来たのだ。そんな訳だから、もちろん未踏峰と言う訳ではないが毎年だれかが登ると言ったほど荒れた山でも無さそうだった。それで OK としたが、フンザからディランを眺めると右手前にある岩峰そのものでは無かったのはほんの少し残念だった。そんな訳でミルシカルの姿は事前に知ることの出来ない出発だった。出発までの FAX・メール等のやりとりで、パキスタンと私との連絡をすっかりやってくれたのは4年前と同様に、長谷川アルパイン事務所の長谷川昌美さんでまことにもってお世話になりっぱなしで申し訳けない事で恩の返しようがない。彼女がたすけてくれて無ければ誤解勘違いの連続で現地についておおいにトラブルのは間違いないだろう。

成田からイスラマバードまではサーズに対する警戒の消毒とかマスクの着用以外には特別の事もなく飛行し、ナジール事務所のガイドのベイグ君ともすんなり会う事が出来た。イスラマバードからミルシカルの登山基地となるミナピン村まではフライト 1 日とドライブ半日で軽く入れるつもりだったが、天候が悪くフライトはダメで 2 日間目一杯のドライブということになった。天候不順なら当然起こるのは土砂崩れで、何となく当然のようにドライブは 3 日間かかってしまい、かなりゲッソリしてたどりついた。とはいえずうっと遡り続けたインダス河の眺めはまことに凄くそこへ落ち込む両側の山の側壁の傾斜の凄さ、流れの速さ、水量の多さどれをとってもこれこそヒマラヤから流れ出した大河の貫禄を思い切り堪能させられたのだった。まだ充分明るい時間にミナピン村のディランゲストハウスについたのに、車からはついに見る事が出来なかった。ミルシカルは一体どこに在るのだと、気のせくまに問うとホテルの屋根を指さして「あれですよ」と言う。見れば首をねじるような仰角でホテルの屋根の一角に真っ白に光るピークが見えた。

オイオイこんな角度を登るのじゃ毎日一ノ倉を登り重ねるような事になるじゃないか。オレ帰るぜと言いたかった。まあ地図でみると登山ルートは向かって右 (西) 側から迂回しつつ登ってゆく訳で、まあ人間的な登路はある。

7月1日、いよいよ登山の第1日目の朝は素晴らしい天気で明けた。8時にディランゲストハウスを出発し、そこから村の上部を横切る水路に沿ってほとんど水平に西のミナピン氷河の末端部下の谷に入りとんでもない傾斜の岩壁についた道を登る。全く人間という生き物は何故にこんなところに踏み跡をつけ、ついにロバが登れるほどに広げるのだろうか。ともあれ、その岩道を

登り上部の樹林帯に潜り込んで左上に見えてくるミルシカルの頭を眺めながらぐんぐん高度を上げ、この谷唯一の夏小屋を過ぎ、屋頃に 3450m の高さにあるハパクンの草原にテントを張り、今夜はここを泊場とする。

時間はまだたっぷりあるのだが、今日は 1250m の高度を上げており、この辺での無駄な頑張りや後の高度障害の原因となるので、ゆっくりとかまえ余った時間は周りの散歩で出来るだけ体調を整えるように努めた。

7月2日、今日もミナピン氷河の左岸沿いを登り、森林限界を越えたところ、サッカー場をたてに五つも並べたような大きな草原のタガファリにテントを張った。この直下の壁のトラバースはロバには通れずこれより上部はポーターの背で荷を上げる事になる。ここタガファリは 3700m の高度でここまでは、大小のトレッキングパーティが登って来るとの事でモレーンの丘に登るとディランの眺めが素晴らしかった。

7月3日山の3日目は、4時間をかけてミナピン氷河を横切り氷河の中の氷の小さな山谷を無数に上り下りしながら 3900m のカチェリへと登る。登ると言っても 1日かかってたった 200m 高度を上げるにすぎないのだが、小さな上り下りを繰り返した



まには氷河の中の ▲タガファリ付近からのディラン (7273m) 川を飛び越えたりでそんな簡単な物ではなかった。ただし、ヒドンクレパスは無く神経的には楽なものだった。

そんな訳で比較的にリラックスした感じで強い日差しに騙された私は T シャツ 1 枚で歩いていたのだが、その割には日陰になる腹部は冷えてしまったらしく胃が痛くなって来て残りの 1 時間くらいはウエストポーチをその部分にあてて歩き何とかそれ以上悪くならないように保った。

到着したカチェリは、ディランのベースキャンプ地ともなっていて氷河のモレーンの外側の平地で、ほんのもうしわけ程度に草が生えている場所だった。

有難いことにはこの地を訪れる歴代の登山隊の節操が伺えるように辺りには何の残留物もなく、きれいに自然が保たれていてモレーンの丘に登るとディランからラカポシへの眺めは素晴らしく目の前にせまる対岸の氷壁には圧倒される。若しそれを登るような山を計画していたなら眠られなくなってしまいうに違いない。この所、日本人パーティのディランへのアタックはかなりひんぱんであり、残念な事に事故も多く、道中 2 箇所にはレリーフをみた。又ハイポーターのグルは日本人パーティのハイポーターとして参加したがそのリーダーは最終アタック時にロープが切れて墜落死してしまったとの事だった。(そのグルは別の機会にディランに登頂するチャンスがあったそうだが) それにしても

良い山だ。私も若い時期にいまのような機会を得る事が有ったなら間違いなくアタックをした事だろうと思う。

ともあれ、昼間の腹痛は夕食時にも尾をひき、せっかくコックのアマンがいていねいに作ってくれた食事も「じゃあな」と言ってキッチンテントを出て間もなくすっきりもどしてしまった。

どうも、私の胃腸は弱くて仕方が無い。まあ超過労の安全弁と言えなくもないが、困ったものだ。仕方無く明日1日は、何も食わずに胃腸を休ませる事にしてその持ち主である私の行動も休むより仕方もなく、隊の動きも明日はすっきり停止する事となった。

日本を出てから休み無く動き続けたので、やはり身体がストライキを起こすタイミングだったのだろう。そんな訳で7月4日は終日ディラン・ラカポシを眺めながらすごしたが、何もしないと言う事は、強い陽射しにただひたすら耐えるだけの1日となりかえって行動しているほうが気が紛れると言う事に気がついただけの事だった。

私のテントは冬用なので入口をどう広げてもそれほどオープンとはならず暑くてかなわない。キッチンテントは大きく入口が広がりスペースも広く1番快適なのだが私がいる間は皆がリラックス出来なく気の毒なので遠慮して自分のテントに帰り、私が気の毒になるのだった。

7月5日、山の5日目は、ディランのベース地を後にして、そこから約500m登り、ミルシカルのベースとなるカチェリレークと呼ぶカチェリの真上の雪がなくなると小さな池が出来るという台地まで登った。

ルートは放し飼いにされている牛の踏み跡をひろいながら尾根にからみ登りぐんぐんと高度をあげる。あまり頑張ると高度障害を呼び込んでしまうのでスピードは抑え気味に登るのだがやはり十分に苦しい。そんなこんなでも昼前にはベースの予定地についた。

ここの高度は4400mで植物(草花)の限界となった。こちらはミルシカルの南西面になるので雪は沢筋に下りてきているだけなのだが氷河をはさんだ対岸のラカポシグループの北面は500mも下の氷河からすっきりつながった氷壁なのだ。強烈な日照の差はこんなにまで山の姿を変えてしまうのだ。ポーター達とグルは今日の中に下山するのであわただしく下っていきベース



▲アリアバードからのミルシカル(5486m)

キャンプはガイドのベイグとアユーブにコックのアマンの4人となった。急に静かになったテント周辺にはこの地域でもっとも高い位置に咲く花が細い茎にささえられ、たよりなくゆれながら精一杯に美しく咲いていた。踏みつけないように気を配りながら付近を散策し歩きまわり出来るだけ高度に身体を馴らすようにつとめた。明日はグルが自分の登山装備を持って登ってくるのを待ってこの上の小尾根を400mほど登り4800mの岩の頭にアタックキャンプを上げる予定だ。

7月6日、5時頃少しの雨が降って明けた。明け方にあまり感じの良くない夢を見て目覚めて少し鬱になった。どうやらアタックが近くずいて来て身体もプレッシャーに反応して夢の内容に影響したらしい。いい歳をして情けないが否いい歳となったからこそ弱気の虫が顔をだすのだろう。

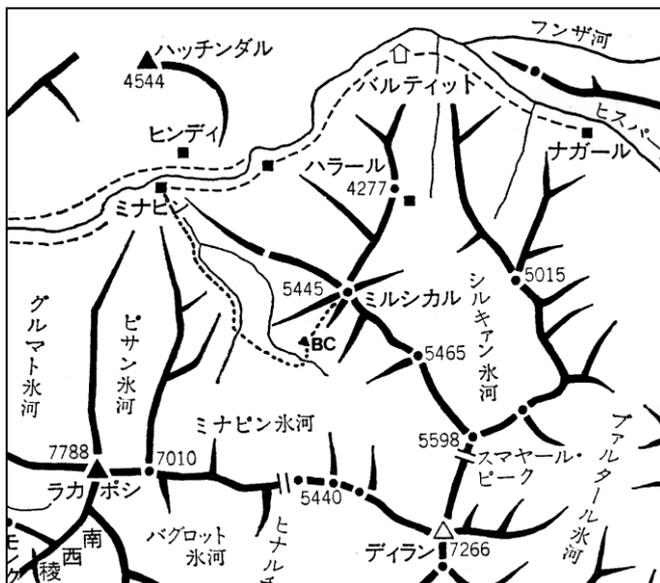
グルは予想した通りに11時に登ってきた。多分彼は当初の予定では頂上へは登る予定では無かったが、メンバーの配置の都合で急遽登ることに変わり、登攀具をとりにおりたらしいのだがベイグはあまり話したがない。多分彼にその原因があるのだが。

早目のランチをとり、グルの真剣なお祈りの後に出発した。既にミルシカルの頂上を踏んだ経験のあるグルのこれほど真剣なお祈りをしているのをみると、改めて頂上へのルートの困難性とか危険性を認識させられるような思いだった。

今日は、すぐ上の小尾根を登るだけと簡単に考えていて、私は何となくあっさりした服装のまま、予備の衣類等は、張り切ったグルがでかいザックにほうり込むのを何と無く見過ごしてしまっていたが失敗だった。

案に相違して小尾根の登りは長くきつくはじめはガンガン飛ばして登っていったグルでさえバテてくるし私も当然なことにバテバテとなってしまった。雪のついたガラは一步ごとに崩れ落ち能率の悪いことおびた。おまけに3時間ほどする頃から冷たい雨が降り始め身体は容赦なくぬらされてしまった。雨具はグルが背負った荷の中に入れており、そのグルは大分上で座り込んでぼんやりと私の方向をみているが自分の背中に入っている事には意識がおよばないようだった。

4800mのアタックキャンプの予定地までには4時間もかかってしまい寒いしバテるし最悪だった。ここまであがって来ないベイグは調子良く、「2時間もあれば楽勝ですよ」なんて言っていたがあのお気楽ガイドめ「帰ったら雪の中にうめてやろうじゃないか」と話すとアユーブもグルも嬉しそうに笑った。ともあれアユーブ



が私のテントにラーメンを運んできてくれ、腹をあたためる事ができやっと一息つけた。

ここの高さは4800mであり明日のアタックは約700mの登下降となる。私にとってはかなり長い距離だ。とにかくベストを尽くせば結果はどうでも良いさ。と覚悟がきまったらアッサリと眠る事が出来た。

7月7日いよいよアタックの朝となる。空は半分半分で結構湿っぽい雲が有り少々鬱っとおしい雰囲気だった。アユーブの「メイビーオーライ」と言うあまり自身の無い言葉に乗り、出発する事にした。昨日までダボダボのパキスタン服の上にセーターを重ねていたグルもなかなかスマートなニッカズボンでザイルを腰に巻いてスタンバイした。少し遅い時間となったが7時にテント脇からいきなりアンザイレンしアイゼンもつけて出発した。グルが空身で先導し2番に私ラストに荷を背負ったアユーブの順だった。

頂上直下の壁の下のプラトーへむけ広い雪面を技術的にはなんと言う事も無い登りを続け、プラトーへは大体3時間半位かかった。特に快調でも不調でもなくゆっくりだが着実なペースを保つことが出来て高度障害の気配はない。プラトーは奥の壁の立ち上がりから5~60m位はなれていて落石、雪崩の跡もなく安全な位置と思われ、ここまで最終キャンプを上げられれば登頂の可能性はずいぶん高くなるとおもわれた。

ベースキャンプでの作戦会議での「上部にはキャンプ地は無い」言ったグルの言葉には少々納得のいかない思いだ。行動食を食べ、下から見てやや左向きに頂稜に突き上げるマチガ沢上部位の傾斜を持つクーロアルに登路を求め根元のクレバスを慎重に越えて登りにはいる。雪質は適当で、丁度アイゼンの爪がもぐる程度で安定感があった。落ちれば止めることは難しいだろうが恐怖感はそのほど強く感じなかった。それでも流石に身体はきつくなり、数歩ごとに上部をながめながらため息ばかりでピッチはさっぱり上がらない。いわゆるヒマラヤピッチとゆう奴だ。とは言っても私の場合いつもこんなもので、日本の山でも近頃はコースタイムといい勝負の鈍足なので高度障害については心配をする状態ではなかった。グルはじょじょに右よりにルートを取り、という事はより頂上へダイレクトに向か



▲ミルシカル(5486m)頂上付近

う強気なラインをとり岩から岩を縫うよう頑張り、ついに頂稜に立った。時間は1時半頃、テントを出てから6時間半位たっていた。気が付くと雪が降っていて、アユーブが「天気が悪くなって来たので急ぎましょう」と

言ってきた。「オーライ」と答え傾斜のおちた頂稜を右手の高みへ向かってピッチを上げてみるとなんと身体がしっかりと反応してそれほど苦しまずにスピードを上げてくれたではないか。

高い所でこんなに調子がよい事は初めてなのですっかり気分を良くして、あと30分以内で頂上は戴きだなど確信し頂上での写真のポーズ等を頭にうかべながら、数分頑張っているとアユーブとグルが、急に「デンジャー」を連呼しだした。

話し合ってみると彼らにはこの天候が非常に悪く感じるようで、私の「この程度の雪では日本では問題にしない」という言葉にも彼らは納得しなかった。私は昨日と違って服装もきちんと整えていたので寒さも手足の冷たさも全く感じていなかったし難しい所は既に乗り越えているのだからここで下りるなどと言う事は考えられないのだが、おとなしいアユーブまで「もう登頂したと同じだから」とまで言う。でも現実に自分より高い場所があれば登頂とは言えまい。この先はガスで見通しが効かないので頂上がここよりどの位高いのかも確認も出来ないのだが、まあ今回は初登頂と言う訳でもないし、ここまでの動きで、自分自身の頑張りには納得もしているので彼等の意見に従う事にして、そこを私の最高到達点として下山にかかった。

その位置は多分頂上より高さにして50m以内水平距離にして左(北西)へ300m以内の所と思われた。クーロアルの下りはずいぶん長く辛かったし変な事で「デンジャー」だった。それは先頭をおりるグルのピッケル・アイゼンワークは、はっきり言ってイマイチで、どうしてもピッケルをもっている右へカーブしてしまい岩の上部へ出て行くので」そのたびに私かアユーブの声によって左へトラバースして改めて下りだし、またまた右カーブで危険な岩の上へとを繰り返した。そこでスリップすればいきなり岩へ飛び込んでしまい止める術も無い。

私は用心してグル側のザイルをたぐって左手にループを持って彼の動きに注意したが案の定彼は3度ほどしりもちをつきザイルにテンションをかけたまま暫く休んでしまったりした。心配したアユーブが距離を縮めて来たが彼の持っているザイルが多すぎて上手く処理が出来ていないらしく、私のうしろから足元からみついたりして、思った以上に「デンジャー」で長いクーロアルの下降となり、プラトーまで下りきった時はかなりの事ホットした。

それからテントまでの幅の広い雪面はただクタクタとたるんで下りればよかったのだがテントの300mほど上部でガスに巻かれて方向を失ってしまい数分間ウロウロしてしまった。これが結構身体にこたえたが、上手い具合に私が登りの時のアイゼンの跡を見つけ自分はそこにキープして2人に動きを止めてもらってお互いの姿を確認しながらガスの晴れるのを待った。私の位置が当りで周りが見えるようになると見事にテントの位置を捕まえていた。「どうだいオイ。日本人は雪に強いんだぞ」と私は本気で威張った。

7月8日アタックの翌朝は雪で明けた。あれあれ昨日でいなければ今日も雪なら(実の所その翌日も雨だった)アタックに出られず終いになるところだった。パーフェクトの天気でもなかった昨日の出発はアユーブの「多分」に乗って良かった。紅茶とラーメンと木

の実の朝食のあと、テントについた雪をバコンバコンと振り飛ばしアタックキャンプを撤収した。岩の上の薄い氷は滑りやすく決して快適な下りと言う訳ではないが、もう勝負は終わったのでかなりラフな感じで、下に見えるB・Cに向かって一昨日の登りルートとは関係なくダイレクトに下り、見た憶えの無い沢が出てきてもう腹をこわしても問題ないので、その水をガブ飲みしたりしながらそれぞれが勝手に歩んだ。

我々の姿を見たベイグが登ってきて私のほんの小さいサブザックを代わって担ぎ少し間の悪そうに私の前を先導した。BCではコックのアマンがシャイな普段に似ず両手をひろげて抱きついて無事の帰還を祝福してくれた。そしてやたらと張り切って鍋をガンガンたたきながらさっきACを出る時に食事をすましたばかりなのにポリウムたっぷりな焼き飯を作り「さあ、どんどん食べてくれ」だ。いくら何でもまだACを出る時にラーメンと木の実の変な朝飯を食ってから3時間しかたっていないので残念ながら少々お付き合いしただけで、雨もようなので暑くない自分のテントにもぐっていつの間にかぐっすり眠ってしまった。

夕方に夢をみながら目が覚めた。内容は忘れてしまったが自分の笑い声で起きたのだから楽しい内容だったのは間違いない。プレッシャーがぬけるとこうもげんきんに身の内が変わってしまう自分に「全くいい歳をして」と呆れる。

実の所ACへ登る朝は、仕事と家での何ともいやな夢をみて目が覚め、そのままムネにしまっておくとずいぶんストレスがたまりそうな気がしたので、その事を日記帖に書き捨てて置いたのだった。不成功でもアタックが終了するととたんに夢の内容が楽しい物に変わってしまう自分には、つくづく人間が出来ていない。と感じざるを得ない。

7月9日、下山予定の朝は、またまた雨で明けた。タガファリに待機しているポーター達はこの雨では多分登っては来られないだろうから今日は停滞という事になる。ベイグは私が早く下りたがって居るかと思いを私とベイグだけ先に下りるか聞いてきたが強い陽射しさえなければこの位置での滞在は少しも不快な事はないので「いや、皆と一緒に良いさ」と答える。アユーブが嬉しそうに「ストロングサーブ」と私の肩をたたく。

アタックの時の私の高所での頑張り、彼にとって嬉しかったらしく、あれ以来何かと言うと「ストロング」だ。まあその反対よりは良いが、多分、下の方で登る足が遅くゆっくりと足を運ぶ私に少々不安を感じていたのだろうが、高所で目減りをしないで雪の技術では彼等に負担をかける事が無かったのですっかり株が上がったらしい。雨の中に咲く花が一段と美しく映え、ゆっくりと堪能させてもらった。

7月10日、夜明け頃は雨だったが、今日はそれも明るく尻上りに好天となってきたので、ポーターは登って来れると判断して荷物とアマンを残して私達4人は下山にかかる。氷河までは急な下りなので、ほとんど1ピッチでおりてしまい、おりきった所で今朝タガファリから登って来たポーターの先頭の3人とすれ違った。空身だとは言えずすごい速足ですっすつと小気味よく登っていった。

我々は入れ違いに氷河のななめ下りの横断にはいった。氷河の中は10~15mの氷の塔とその間を通り小川が流

れたり、たまにはそれが池を作っていたりしてまことに変化に富んでいて面白いといえば面白いが疲れてくる頃は結構イライラする。中々越せない水辺でふてくされて水泳のスタートのポーズをとってベイグをからかったり、本当に落ちこちたりしながら、時々氷が作った椅子にかけビスケットをかじり、長い間お馴染みとなったディラン・ラカボシになごりを惜しむ。

登りの時、ポーターのためにルート工作をした4~50mのモレーンの丘を登り越してタガファリの草原に降り立ったのは昼頃だった。そこでは10才位の男の子が3人でいてグルに話しかけてきて、珍しい事と思い聞いてみると、この子達はポーターの弟だったり子供だったり、兄や父について来てトレッキングを楽しんでいるとの事でこちらも楽しい気分になってもらった。ついでに我々は今の所、茶をもっていないので、ポーター達のそれを子供達に出してもらいかついで来たビスケットとでランチとした。いい具合に午後になると雲がでてそう暑くは無く助かった。テントの中からモレーンの中腹で牛が草を食むのをボンヤリとみているとそのノンビリした姿に心が癒される。その奥に相変わらずミルシカルの上が見えていて登りの時に同じような格好で同じ風景を緊張感なしでは見られなかった事を想いだす。

7月11日、タガファリを7時半に発ち、最後の山道を楽しみながら下りたが、さすがに下り道は早く、10時半にはもうミナピン村のディランゲストハウスについてしまい今回の山行は終了した。

途中の草花、チーズを作っている夏小屋、村の真上の急な下り、そして村の上の水路とその周りのポプラの林、それらの一つ一つが本当に別れ難い風景であり、駆け抜けてしまうのが惜しいものであった。

ゲストハウスでハイポーターのグルとコックのアマンとに別れの握手してフンザの中心地のカリマバードへ向かう途中のアリアバードのナジール事務所でガイドのアユーブとも別れ、夕方にフンザの泊り宿のバルティットインにはベイグと2人で入り、その夜からベイグは自宅で泊るのでホテルには私1人の宿泊となった。我がミルシカル登山隊は下山後数時間ですっかり解散となったのだ。その後、バルティットインをベースに3日感をフンザで過ごしその中の1日を利用し、ウルタルのベースキャンプ地にある長谷川恒男さんのお墓参りをし、周辺を見聞した。ここからのウルタルはあまりに近すぎて目の前の岩壁や氷壁にさえぎられてその上部を見る事はできない。ここから頂上へのルートを拓くとしたら先ず絶望的だ。1982年まだこの山が未踏峰だった頃、朝霧山岳会の植田・西原たちのメンバーはここから果敢にアタックし、すざましい岩壁・氷壁にルートを伸ばしついに稜線にまで達するとゆう驚異的な行動をやったのけたのだった。怪我人はだしたものの全員生還できたのはむしろ幸運と思えるほどのものだ。その後長谷川さんはナジールも加えたウータンクラブ隊で少し右よりのルートを開拓中に雪崩に遭い星野さんと共にこの地に眠っているのだ。こんな感慨を胸に、カリマバードへ下りて、この地での行動は終わりとなった。

海老原(道)記

